

会 議 記 録

| | |
|-------|--|
| 会議名称 | 第3回 杉並区基本構想審議会「第3部会」 |
| 日 時 | 令和2年12月3日（木）午後6時01分～午後8時04分 |
| 場 所 | 中棟5階 第3・第4委員会室 |
| 出席者 | 委員 大竹、牧野、枡尾、本郷、富田、岩田、西山、本城 区側 子ども家庭部長、教育委員会事務局次長、教育政策担当部長、 地域活性化担当部長、企画課長、文化・交流課長、スポーツ振興課長、 子ども家庭部管理課長、教育委員会事務局庶務課長、企画調整担当係長 |
| 配付資料 | ○第3部会資料 資料15 区の施設のインターネット環境の現状について 資料16 区内の文化施設数・文化芸術関連の店舗数の推移 資料17 体育施設 利用登録団体数及び利用登録者数の推移 資料18 様式2-2 まとめ補助シート<子ども分野>【当日配付】 資料19 他部会委員から第3部会への意見一覧【当日配付】 ○全部会共通資料 ※基本構想審議会で配布済み 資料19 様式2-1 まとめシート 資料20-5 現基本構想（10年ビジョン）に基づく取組の進捗状況 （目標5）人を育み共につながる心豊かなまち ○第3部会資料 ※基本構想審議会第3部会第2回で配布済み 資料9 文化・芸術の振興 資料12 健康スポーツライフ杉並プランに基づく取組状況等について |
| 会議次第 | 1 開会 2 議事 【テーマ：文化・スポーツ】 3 今後のスケジュールについて 4 閉会 |
| 傍聴者 | 2名 |
| 会議の結果 | 個別テーマ【文化・スポーツ】について、区が提示した資料等を踏まえ、委員間の討議を行った。 |

○部会長 皆さん、こんばんは。定刻になりましたので、杉並区基本構想審議会第3部会の第3回の審議を開始いたします。

本日は8名が出席で、欠席は1名でタケカワ委員です。山ノ内委員は、オンラインで傍聴されるということでございます。泉委員につきましては、遅れて参加ということでございます。委員の出席は過半数を超えておりますので、本会が有効に成立していることを報告させていただきます。

それでは、議事に入ります前に、本日使用する資料と会議の全体のあらましについて、あらかじめ皆さんと共有したいと思いますので、事務局から説明をお願いします。

○文化・交流課長 はい。文化・交流課長の田森でございます。

まず初めに、前回お配りしました、資料9「文化・芸術の振興」と資料12「健康スポーツライフ杉並プラン」に基づく取組状況等について」を改めて席上配付させていただきました。1点訂正がございます。資料9の「文化・芸術の振興」の、【④座・高円寺 来場者数・稼働率】の枠組みのところですが、座・高円寺1の座席数について前回お配りした資料では244席ですが、正しくは238席の誤りでございました。席上にお配りしている資料は、訂正したものでございます。大変失礼いたしました。

○地域活性化担当部長 皆さん、こんばんは。部会事務局サブリーダーの岡本でございます。私から、本日の配付資料と議事内容について、簡単にご説明いたします。座って説明させていただきます。

まず配付資料の説明ですが、委員の皆様事前に送りました資料は部会テーマに関連する内容として、追加資料のご要望を頂いたものでございます。

三つありまして、資料の15が「区の施設のインターネット環境の現状について」。資料16、「区内の文化施設・文化芸術関連の店舗数の推移」。三つ目が、資料17、「体育施設利用登録団体数及び利用登録者数の推移」でございます。これらの資料の説明につきましては割愛させていただきますが、ご審議の中で不明な点等ございましたら、お問い合わせいただければと存じます。

続いて、本日席上に配付した資料ですが、まず資料18、こちらは前回ご審議いただいた子ども分野に関する様式2-2の、まとめの補助シートです。また、他部会の委員から、第3部会への意見提出がございました。資料の19として他部会委員から第3部会への意見一覧にまとめておりますので、今後の議論の参考としていただければと存じます。

なお、先ほど文化・交流課長からご説明いたしました、A3資料の資料9と資料12、こち

らも審議の参考にさせていただければと存じます。

次に、本日の議事内容でございますが、第3回の本日のテーマは、「文化・スポーツ」です。現在の杉並区総合計画・実行計画における施策としては、「文化・芸術の振興」、それから、「学びとスポーツで世代をつなぐ豊かな地域づくり」となっておりますが、次の10年間を見据えて、文化・スポーツをテーマに幅広く皆様にご審議いただければと存じます。

本日は、文化・スポーツのテーマを分け隔てるものではございませんが、議論を効果的に進める上で、文化を中心にご審議いただく時間、そしてスポーツを中心にご審議いただく時間を分けております。最後に、文化・スポーツをまとめて総合的にお話しいただく時間を設けていただければと存じます。

なお、本日の到達点といたしましては、文化・スポーツをテーマに共通様式の2-2のまとめシートに整理をしていくということになってございますので、ご審議どうぞよろしくお願いいたします。私からは以上です。

○子ども家庭部管理課長 続きます、部会事務局の子ども家庭部管理課長の福原でございます。

前回の部会の振り返りをさせていただきます。部会資料の18、様式2-2、まとめ補助シートをご覧ください。

前回の部会で幅広くご審議を頂きました内容を確認する意味で整理いたしまして、このシートのA欄からC欄に落とし込んでございます。最終的には、様式2-1、まとめシートを作っていくことになるんですけども、12月21日に予定しております第5回の部会でご確認いただくこととなりますので、議論が不足している点などございましたら、第3回、また次回の第4回で関連する事項についてご議論いただくか、共通様式3「部会への意見提出について」によりご提出いただければと存じます。説明は、以上でございます。

○部会長 ありがとうございます。

本日の会議終了は8時を目途としますが、審議の状況によっては30分程度、延長することがあるかもしれません。その際にはご協力いただければと思います。

ただいま、泉委員から、欠席という連絡が入りましたので、本日はタケカワ委員と泉委員が欠席で、進めさせていただきます。それでは、議事に入ります。

ただいまの事務局から説明のとおり、部会に与えられたミッションである、様式2-1、まとめシートの作成を念頭に置きながら、審議を進めていきたいと思っております。

本日のテーマは、「文化・スポーツ」です。事務局からありましたとおり、文化・スポーツをテーマとして分け隔てるものではございませんが、議論を効果的に進めるためにも、文化を中心とした時間をおおむね45分、スポーツを中心とした時間をおおむね45分、残りの時間で、これまで出された意見のまとめと、文化・スポーツを総合的に議論する時間としていきたいと思っております。進め方につきまして、よろしいでしょうか。

(了承)

○部会長 はい。ありがとうございました。

それでは、発言される方は挙手をお願いします。また満遍なく各委員が発言できるように、ご自身の発言を簡潔にお願いします。

前半は45分、文化をテーマとしてお願いしたいと思っております。いかがでしょうか。

○委員 難しいですよね……。

○部会長 難しい。特に文化のところでは、今日、ちょうど中心となるメンバーのタケカワ委員と泉委員が欠席ということになってしまったので。

○委員 一番お話が聞きたかった。

○部会長 そうですね。はい、どうぞ。

○委員 はい、ありがとうございます。

僕からちょっと1点、まず言いたいなと思ったのが、やはり多文化交流の重要性ということですね。資料9ですかね、以前配られた「数字で見る杉並区」にも書いてあるとおり、杉並区内の外国人の人口というのは年々増えてきています。僕自身も感じているのが、道を歩いているだけでも、外国語を耳にする機会も普通に増えている。

ただ、外国からの方がいらっしゃっている一方で、彼らとの交流というのが増えているかということ、必ずしもそうではないと思うんですよ。前回の部会でも出たような、コミュニティの中での交流というものが重要だと思うので、せっかく外国人の人口も増えてきているわけですから、排斥する方向ではなくて、子どものうちから文化交流とか、そういうものができればいいのかなと考えています。

○部会長 貴重なご意見、ありがとうございます。

数年前のデータですと、日本で、外国籍で片親ないし、両親から生まれる子どもって、30人に1人ぐらいという数字もあったりするので、もう特別なことではなくて、30人や40人学級だったら、1人ぐらいはいるような割合で、全国平均では生まれている。

外国から入ってくるだけではなくて、こちらで生活して、出産をしてというような方々

もいらっしゃる。そうすると、生活する上で、文化の違いや、言葉が分からないとか、通常の行事と日本の文化が分からずに、相当ストレスを感じているという方々もいらっしゃるのではないかなと思いますよね。

そんなことも含めて、今、多文化交流、子どものときから、そういった交流ができるような、そんなまちになればいいと。そのためにはどのような方策が必要なのかということ、今後検討していければと思います。ありがとうございます。

何か、そのほか。では、お願いします。

○委員 僕は、今回のこのテーマを、改めて考えてくることがなかったの、浅い話になってしまうかもしれないんですけども。

今、お話があった多文化交流というのは、重要と思うんですね。「排斥することなく」とおっしゃられていたのが、そうだなと。

というのは、44年生きてきて、他の国を蔑視するような見方というのが、日本国内で、すごく強い部分もあると思うんですね。アジアの中で差別的に見ているというのが、僕の中にもやっぱりたまに出てくる。国内製品よりも海外製品のほうが質が低いという見方を、国産のほうがいいというような思いが。最近じゃ、全然違うと思うんですけども。

なので、やはり大人の世代でそういった認識がまだまだ無意識のうちに根強くあるんじゃないのかなと僕は思っています。そういうことが子どもたちに伝染しないような、そういう社会にしていきたいなと、常日頃から思っています。当たり前、いろいろな国のいろいろな民族の文化が周りにあるという形というのが、今後どんどん増えてくる。そういう中で、大人がどう対応できるのかというのを考えていかなきゃいけないのかなと、今お話を聞いて、改めて思いました。

○部会長 ありがとうございます。

差別偏見の根本は何かというと、無知。正しい理解がないから差別偏見につながっていくところでは、そういった正しい知識、理解をしていくということはすごく重要になってくるんじゃないかなと思います。はい、どうぞお願いします。

○委員 はい。では、まとめシートの2-1の、現状と課題のA欄が二つほどあって、そのうちの 하나가（今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点）というところがあったかと思えます。

前回ですかね、第3部会資料3「各テーマ別 審議のポイント」で、テーマ【文化】のところの三つ目に、「市の施設のインターネット光化」ということで、「市の全ての施設で、

無料の光Wi-Fiを使えると助かる。特に、配信を考えてホールやリハーサル室」とあります。これは、私が書いたものではないんですけども。そういった提起もあったので、今回の資料15が、まさにリアルタイムで取り組んでいるBWAの状況の資料としてつけていただいたんだと思います。

私も、音楽をやっている友人からも、この春以降の状況を受けて、そういった地域施設での活動が、基本的に定員の半分以下でやってくださいとなったので、同時配信ができるとありがたいんだけど、というようなことの話を受けました。今、取り組んでいる、この地域BWAを活用したとしても、この資料3で示されているように、いわゆるホールやリハーサル室から使えるということではないかと思います。あくまでも防災や観光で、いわゆる入り口近くというんですかね、ロビー近辺で使うということが前提だと思いますので、今後、そういった区立施設で、普通のホール等もそうですけれども、もう少し小さい、集会室等でも文化活動等をしていくときに、今後の社会環境ということを考えると、こういった設備を備えておくべきかということは今後に向けては一つの課題といいますか、検討する事項になるのかなと思っています。

○部会長 はい。ありがとうございます。

○委員 今、いろいろな設備を備えて、いろんな形で文化・芸術が発展できるようにということでお話が出たんですけど、海外から帰ってきて杉並区に戻ると、設備ってすごい整っているなという印象で、音楽、杉並公会堂も自分の子どもの頃と比べると、ものすごくよくなっているし、いろいろな文化設備は割と整っているなと思っていますね。

ただ、担い手というか、それを小さなサークルのような形で、誰もが好きなところにちゃんと参加できて、やめたければすぐやめられるというような、そういったソフトの部分。

杉並区に関して言えば、お金もすごくかけているし、十分ハードはあるんじゃないかなと思っていますんですけど、あとは、ソフトの部分で、一人ひとりやりたいことがもっと簡単にできて、参加する人も簡単に参加できて、やめたいときもすぐやめられる。

例えば、小学生が、ちょっと演劇をやってみただけで、1年くらいで、やっぱり演劇じゃなくて、バイオリンを弾きたい、サッカーをやりたいんですけど、で、1年で辞めてもいいし、野球に変えてもいいし、野球の子がサッカーに変わってもいいし、というような。

日本は、何か1回やると子どもに関しては「長く続けなきゃ駄目」とか、「こんなので諦めてどうするの」、とか、親が励ましたり、がむしゃらに、ど根性とかで頑張っちゃうんですけど。そうではなくて、もっとソフトに、ちょっとやってみて好きなら続けて、

嫌だと思ったらやめてもいいという、そういったソフトな後押しというか。

文化って、もしカルチャーから来ているのであれば、カルティベートというか、その機会を設けて、「はい、文化やりました。」みたいなんじゃないかと、非日常の中で流れていくもの、そして耕されていくものなので、そういったサポートができるといいなと思います。

○部会長 はい。ありがとうございます。そういうサポートができるような社会になっていけばいいなというところですね。

○委員 そうですね。

○部会長 先ほどのインターネットについては、東大はしっかりしているでしょうけれど、我々の大学もオンラインに変わってきたときに、本当に設備が充実していない状況で、本学も学生に1人5万円ずつ配付して、そういった準備をできるようにしたということがあります。今回のコロナ禍において、今日もオンラインで入ってきておりますけども、去年までだったらこんなスタイルはなかったけど、もう今の学生たちはオンラインというのが、通常の生活に入っていくんじゃないかなということは、すごく感じています。こうした中であって、そういった設備やつながるような場所がないということは、やはり大きな課題として見えてきたなと思っています。

そのほか、何か「文化」で日頃思っていること等があれば、お願いしたいと思います。

副部会長、いかがですか。

○副部会長 よろしいですか。いろいろ考えていて、考えがまとまりません。言いたいことはいっぱいあるのですけれど。

まず、議論の仕方についてなのですが、やはり文化は難しいなという感じはあると思うのです。今のご意見もそうですけれども、基本的には、異質なものと違ったものをどう受け入れていくのかという、いわゆるダイバーシティ、多様性という問題がある。

次に、それを、どう受け入れるのか、一緒に共存していくのかというインクルーシブなというか、インクルージョンという問題がある。さらに、もう一つ、今お話がありましたように、それをどう表現をしていくというか、表現するのに、どうやって、どんな施設が必要で、どのようなバックアップがあったらいいかということもあるかもしれません。

それから、やはりこの部会では、いわゆる教育、将来の子どものことを考えながら、ということになると思いますので、子どもという存在がどういう存在なのか、といたしますか、この私たちの議論では、従来のように基本的には枠にはめていくとか、ある子ども像を設

けて、大人がそれを達成して行くにはどうしたらよいのかということよりは、子どもたちが自分で自分の人生を切り開いていくのを大人がどうバックアップできるか、という議論にできたらいいなと思っているのです。

その意味では、日常生活上の違いみたいなもの、例えば外国の方々との共存や共生であったりですか、さらには年齢層によっても違う。これをどう受け入れるのか。たとえば、日本の若者、特に大学生は、高齢者について、すごく嫌いだという調査結果が出ているのです。これは、世界的にも有名なことで、欧米の学生よりも日本の学生のほうが、高齢者を毛嫌いしているという結果が、いろんな調査で出ているのです。なぜ毛嫌いしているかということ、実は、高齢者についてよく知らないのです。よく知らないし、学んだこともなくて、高齢化するとはどういうことか、ということを知らないまま、「嫌いだ」となってしまうという結果が出ていて、それで、「なぜだ」という議論になると、「分からない」という結論なのです。簡単に言えば、あまりにも高齢化の速度が速過ぎて、十分に高齢者を社会に位置づけられないまま来てしまったのではないかとされているだけなのです。

例えば、国際化も、あまりにも急速過ぎて、外国人を受け入れて、十分に社会に位置づけることができないまま来てしまっているということなのかもしれません。もう少し日常生活における、私たちが触れ合うということの基本にしたときの違いみたいなものを、どう受け入れながら、共生、共存を考えるのかという議論も必要でしょう。

それからもう一つは、やはり表現文化のようなもの、たとえば歌ですとか、いわゆる芸術的な文化のようなもの、そうしたものをどう支えていくのかということも議論する必要があります。さらには、その議論の過程で、子どもたちが、これから人生100年生きるということにおいて、お互いに違う存在として生きていく中で、社会を変えていくということになっていくのだらうと思います。そうすると、やはり、子どもというのは、私たち今の大人よりも違った存在、異文化としての子どもの議論もありますけれども、そういう存在なのだと見ることで、私たちが子どもたちの声をどう聞き取るのかというような議論も必要ではないかと思っています。議論の仕方を、少しずつ分けて、焦点化していくと、委員の皆さんからもう少しいろいろとご意見が伺えるのではないかと思って聞いておりました。いかがでしょうか。

○部会長 幾つか焦点を絞って、議論のきっかけをつくっていただきました。

ダイバーシティとかインクルージョンだとか、いろんなお話もありましたし、「違い」というようなところ、そして、今後の「共生、共存」というところ。そうしたところも含

めて、副部会長のお話を伺って、感じたところなど、ご意見を頂ければと思うんですが。

○副部会長 かえって難しくなっていましたね。

○部会長 いえいえ。

○委員 今、若者が高齢者を嫌っているというのは、すごくよく分かるんですね。

きっと高齢者を嫌いになり出した世代って、今40代とか、そういうぐらいの人たちが若いときに、「嫌い、嫌い」というふうになっていたんじゃないのかなというイメージがあるんです、僕の周りを見ていても。それで、何で嫌いなのかというと、社会的な構造、年金をたくさんもらっている世代で、税金を食い潰している世代というイメージがすごく植えつけられていて。僕ら40代から下というのは、バブルも終わっている時期に大人になりつつあって。就職も困難で。

高齢者を老害みたいな言い方をするようになってきたのというのは、僕ら世代からなのかなと。それは、すごくネットの情報に影響されてきているんじゃないのかなと。実際にはどんな生活をしているとか、どんな苦労があるかというのは、僕は議員の仕事をして、相談をすごく受けるようになって、本当に全然年金が足りなくて、生活ができないとかという高齢者の方々の話を聞いているのですけども、周りの若い人たちの苦しい人たちは、「高齢者は年金、俺らよりもたくさんもらって、俺らはそれよりももらえなくて、高齢者のほうがずるい」みたいな、年代差の対立構造みたいなものがあるから、高齢者が嫌いという話になっているんじゃないのかなと、お話を聞いて僕は思いました。

やはり、それは、「知らない」ということから来るんだと思うんですね。自分と違うものを認めないということから来るのかな。そこを課題と認識してどう解消していくかというのは、僕ら個人個人の責任でもあるし、行政としても様々取り組まなきゃいけないものかなと思いました。

○部会長 どうぞ。

○委員 「文化」と聞いたときに、実は、どういう議論をしていいんだろうと本音としては思っていたんですけども。

私の母は今96なんですけども、高井戸にいて、井の頭線の開通を知っている世代なんです。そういった世代を含めて、杉並区というのは、その前というのは本当に雑木林ばかりで。歴史といたら、大正からぐらいの話だろうと思うんですね。ただ、現時点でいくと、私もいろいろテニスの関係で、ほかの区の人とかなり会っているんですけど、杉並区というのは、文化都市というイメージなんですね。

それはなぜかと思っていたんですけど、やはり、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪、西荻窪。演劇をやっている人が多いとか、文化人が多い。文化的な活動をしている人が、自主的に集まってきたんだろうと思うんですね。

行政の人が集まれと言って、集まってきたわけじゃなくて形成されている。井の頭線沿線は、大学、学校が多くて、学生が多くて、いろんな文化圏というか、面白い文化圏ができています。そういった意味でいくと、ほかの区に比べるとちょっと一風変わった、あまのじゃくの住んでいる区なのかもしれないんですけども。先進的な発想もあるし、ちょっと変わった区というふうに見られがちなところが、実は、誇りでもあるんですけども。

では、これからどうしていくんだといったときに、はたと、考えちゃってまして。

先ほどの、「ハードはいいけども」というのは、僕もそう思っていて、ソフトのところ、やはり人なんだろうなと思うんですね。その「自発的に動く人」をどのように増やしていくのか。多様性を含めて受け入れていけば、一番いい。そして、仲間が仲間を呼んでいけば、もっと面白いまちになっていく。それが新たな文化を形成していくというのが、杉並区らしい動きなのかなと、ちょっと思ったりしていました。

○部会長 はい。ありがとうございます。

これまで、多様性であるとかインクルーシブという話がありました。やはり、お互いを知らないから、なかなか理解ができない、認められない。だから、そこで正しい知識、正しく理解するということがすごく重要になってきているのかなということと、学ぶというところでは、子どもたちが、五感でもって理解していく。だから、体験をしていく。

ある高齢者が、「自分がここにいるのは、自分の体を触ってください」と言っていた。

高齢になればこんな体になってくる。障害者の人も言っていました。「ここに自分がいるのは、私を触ってください、私の話を聞いてください。そういうふうなことで、私はここに存在しているんだ」と。

ある施設長が、最終的に間質性肺炎で亡くなっていくんですが、酸素ポンベを引きながら施設長としてやっていて、「私の最後の役割は、この死にざまを子どもたちに見せていくことなんだ」、「これが私の最後の仕事だ」と言って、施設に酸素ポンベを持って、そして亡くなるまで子どもたちの前に立つという。そういった、まさに五感でもって知ることが、子どもたちの心に落ちていくんじゃないかなと。

表面的な理解というんじゃ、お互いがなかなか理解し合えないけど、そこを実感をもって、体験をもって知っていくということが、すごく必要になっているんじゃないか。

幾ら私たちが言葉で子どもたちに伝えても、それは表面的な理解だけであって、本当に、子どもたちが、「そうなんだ」と思える理解の仕方が、求められてもきているのかなと思っているんです。

今、20分を経過してきたので、事務局で中間まとめということで、何かありますか。

○文化・交流課長 文化・交流課長の田森でございます。

興味深く、議論を拝聴させていただきました。異質なものをどのように受け入れていくか。そもそも異質と感ぜさせない工夫が必要だったりするのかなと思いました。

前回お配りした資料、資料9の「今後の課題」の中に、今の議論に関連して、前文のところ、「文化・芸術は人々の創造性を育み、その表現力を高めるとともに、人々の心のつながりや相互に尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることのできる心豊かな社会を形成する」とあります。これは、「文化・芸術基本法」の前文から引用させていただいております。多様な社会を形成するという意味では、文化・芸術の役割というのも非常に大きなものかなと思っており、こちらに書いてございます、文化・芸術の役割といいますか、課題については、ICTですとか、あと文化・芸術は、観光ですとか産業ですとか、まちづくりとか、そういった連携も今後必要で、区として課題認識の一つとして捉えてございます。そのあたりも、ご審議いただければと思います。

○部会長 はい。ありがとうございました。

今、事務局から資料に基づいて説明もありました。そんな視点も持ちながら、後半20分程度ですね、お考え等がありましたらご発言をお願いします。

○副部会長 今の話なのですが、私も先ほど、「分けたら」という話はしたのですが、本来、表現文化や芸術というのは、多様性がないと発展しない、創造性が失われていくものですから、先ほど委員がおっしゃったように、あまのじゃくですか、私みたいな者がいっぱいいるというのが杉並の面白さだとおっしゃっていましたので、そうしたものがあ反面で、委員がおっしゃったこととかかわってくるように思うのです。私は、杉並区民でないものですから、ちょっとよく分からないので、日本の社会全体のことを申し上げますと、多文化主義と言われたのはいつぐらいかという、バブルの頃前後なのです。80年代半ばぐらいからなのです。外国人が急に増えてきた。バブルの頃もそうなのですが、日系ブラジルの方がたくさん日本に出稼ぎに来られるようになったり、それから、中東や東アジアからどんどん日本に入ってくる時期があって、その頃からいわゆる多文化主義と言われたのです。多文化状態ではなくて、多文化主義という意味で、これは政策化されていくと

いうことでもあったわけですが、そのときは、あつけらんとした明るさがあった。

「外国人ともっとうまくやっっていこうよ」とか、「一緒に受け入れていこうよ」と、日本は大丈夫なんだから、みたいな議論がずっとあったのですが、バブルがはじけた後、何が起るかという、排斥というような議論になるのです。

経済的にうまくいっていると、外国人の受入れは大丈夫だということになって、その後30年間ぐらい平成大不況といわれ、失われた世代と呼ばれた人たちが団塊のジュニアの方々にいっしょにやるわけですが、そういった状況で、日本だけでなく、また世界的にも、経済が混乱する中で、何となく排斥になっていく。違うものを嫌うということが起こるようになってくるとい面があるわけです。

私も今日、文化の話を伺っていて、ちょっと気にはなっていたのが、私自身の感覚で言うと、この社会というのは、極めていろんなものを、1回シャッフルして、全部、画一的な議論に持って行ってしまって、本来、横に多様になっていかななくてはいけないものを、縦の序列に組み替えてしまう力学が働いてしまっているのではないかと思うところがあるのです。

もう少し言うと、変わることが怖い、変わりたくないというのを、理屈をこねて「変わらないほうがいいのだ」みたいな形に持ってってしまうようなところがあるのではないかと、ということです。実は、それがこの社会の停滞、閉塞感につながっているような気がするのです。

それを、もう一つ裏返しでいいますと、日本の子どもたちは、世界的には学力はものすごく高く、1位、2位という点を取っているのに、自己肯定感は極めて低いということが、いろんな調査で分かっている、大体アジアで最低ぐらいな自己肯定感なのです。

これは成人もそうなのです。成人基礎力のテストをすると、本当に世界でトップクラス、というか1位なのです。ICTが遅れていると言われながら、ICTのリテラシーは日本人が1位なのです。ですけれども、「自分が勉強すること、学ぶことによって自己を変えていくことができると思いますか？」という、順位ががたっと落ちるとか、「自分が動くことで社会は変えられますか？」という、そう思わない人がとても多い社会なのです。日本人って何でこんなに自信がないのか、というのが、世界的に不思議に見られている一つの傾向なのです。そうしたことが、経済的な凋落というような感覚と絡まって、異質なものを認めたくない、また受け入れたくない、変わりたくないというようなことにつながっているのではないかなという感じもするのです。

今度は逆に、文化的なものとか文化的な多様性といったことを梃子にして、そうした状況を変えられるのか変えられないのか。これまでのように、文化も全部、その異質なものを、違うものを認め合わないものになっていってしまうのか、それとも、文化的なものを梃子にして、異質なものを認め合って、もっと自分が動けば社会は変わるし、もっと自信を持って行動できるのだ、というまちになっていくのかというところで大きな違いが出るのではないかなと受け止めています。

ここでいう文化・スポーツで文化を議論するときにも、少し変な言い方をしますけれど、杉並が何かの起爆剤になるというか、社会を変えていく先端に立てるのですよ、みたいな議論で文化の話ができるといいかなとも思うのです。

そこには当然、いわゆる外国人の方々、外国籍の方々や、あと言語的な多様性という問題ですとか、これは「子どもの権利条約」で母語の保障が当然あるわけですから、なくてはいけないし、さらに障害を持った方々とどう共生するかということも、当然議論されなければいけないと思うのです。そうしたことをうまくここで議論していくことで、総合計画、基本計画の中に組み込んでいけると、これも少し語弊がある言い方をしますけれども、とても面白い社会が出来上がるのではないかなという印象を持っています。

「こうしたらいい」となかなか言えなくて申し訳ないのですけれども、そんな印象を持っています。

○部会長 この杉並から発信できる、起爆剤になるような取組とか。

○委員 いいですか。

○部会長 どうぞ。

○委員 そもそも「異質な」って、その言い方がいいのか分からないですけど、異質なものを、自分とは違うものとの接触の機会というものは、本当に重要だと思います。

ただ、それを始める場として僕が考えたのは、やはり学校という場。小学校とか中学校とかという場がいいのかなと思って。先ほど部会長からあったように、子どもは五感で感じるということを考えたときに、僕自身も小学校に通っていると、学校という場で、自分と異質な存在と出会う機会って、正直なかなかないんですよね。高齢者と出会う機会は、まずほとんどないし、障害を持った方と出会う機会もほとんどない。ましてや、外国からいらっしゃった方とか、違う国の文化を持った方と接触する機会というのがなかなかないということを考えたときに、子どもというものの強みをなかなか生かし切れていないのかなと思います。

先ほどから出ているように、異文化交流の起爆剤として学校というものを使えるのかなと僕は考えました。学校という場に、例えば高齢者を呼んで、どういう悩みがあるのか、老いってどういうものかって、子どもにとっては何も想像つかないんですよね。そういうところや、ほかにもいろんな文化とか、そうした場として学校が使えたらなと考えました。

○部会長 ありがとうございます。

委員、お願いします。

○委員 そうですね、委員が言うとおりに、学校が文化の担い手というところは、すごく大きいと思うんですね。子どもたちにとっては、過ごす時間の長い場所でもありますので。

子どもといえば、私の子どもたちも、小学校3年生まで桃井第二小学校に通っていました。桃井第二小学校というのは結構特殊な文化教育があって、今、続けているのかどうか分からないんですけど、バイオリンの教育があるんですね。早朝練習が3回とかあって、レベルに応じて先生が見てくれるというような学校だったんです。公立なんですけれど。

それで、3年生までうちの娘たちもバイオリンをやっていて、その後、ロンドンに転勤していったんですけど、英語の言語はおぼつかなかったんですけど、音楽を通して地元の人と仲よくなったので、そのまま中学に上がるのに、小学校4年生で中学に上がったんですけど、音楽奨学金ももらえるくらい大好きになってやっていました。

そういった、学校でやるんだけれど、授業とは関係ないようなアクティビティーがあって、それが文化的なアクティビティーであり、そこで活躍できる。そこには学年がなくて、自分で好きだったらどんどん技術を上げていけたりできるシステムがあると、その子が好きなことに打ち込めて、技術が上がっていけば上に上がっていけるというシステムになるのではないかなと思います。バイオリンだけではないと思うんですけど、サッカーとか野球も同じだとは思いますが。

そこに高齢者の方がボランティアで教えに来てくださったりとか、そういった関わりができたりもするのかなと思いました。

○部会長 はい、どうぞ。

○委員 私もいろいろな学校の周年行事とかに出ています、式典が終わったら、子どもたちに合唱とかをさせて、料理を食べたりお酒を飲んだりみたいな周年行事が多い中で、私が印象深かったのが松溪中学の式典だったんですね。

どのようなことをしたかという、先ほど高齢者と若者という話がありましたけども、高齢者も、若者のことが分からなくて、今の教育がよく分かっていなくて、困惑すること

が結構多い。例えば、高齢者が子どもたちに挨拶しても返ってこないとかあるんですけど、これはセーフティ教室とかで、大人から声をかけられても返事をしないようにとか、「知っている人でも疑え」みたいな教育をしてしまっている部分があって、高齢者は防犯のために挨拶は大切ということで思っているんだけど、そこで掛け違えている部分もあったりもします。

話を戻しますけど、高齢者と若者ということで考えると、何周年かは忘れちゃったんですけども松溪中学の式典は、1期生の地元の高齢者と今の学生が話をします。班に分けて話をし、生徒たちが、その1期生が中1のときにどんな環境だったかというのをレポートするんですね。その中で、今の学生たちの悩みとかも聞きながら、高齢者とコミュニケーションを取りながら、それを発表していったんです。それが、さすが学校といいますか、地域ごと、共に学べるような、お互いを理解し合うすごくいい機会をつくって、周年行事としてはすごく秀逸だったなと思いました。学校というのは、みんなが通う場所である。卒業生というのはずっと卒業生。そこを卒業したという誇りを持ちながら、地域に根づいていっていますので、そういう意味で、世代を超えて、本当にいい学びができていたなという感じがしました。

○部会長 ありがとうございます。いい事例をありがとうございます。

はい、どうぞ。

○委員 松溪中学、私も卒業校なんですけれど、帰国して娘が1人、松溪中学の3年生に入って、地元の高齢者の方で英語が得意な先生が、Nは西高のNなんですけれど、Nスペという特別な授業が毎朝あって、ボランティアか、有償だったのか存じ上げないんですけど、されていらっしやいましたね。それが、残念なんですけれど、2年後とかになくなって、今は、どうしてなくなったのかはちょっと分からないんですけど、そういった形で高齢者の方が子どもに教える。授業外の時間を使って得意な分野を教える。Nスペに関して言えば、トップアップ。ボトムアップではなくてトップアップなので、先生のテスト受けて、合格しないとNスペには入れないというようなレベルの英語の授業でしたが、ありましたね。

○部会長 はい。ありがとうございます。

はい、どうぞ。

○委員 僕も子どもたちにこま回しを教えるという活動をしている中で、地域の高齢者の方々と一緒に、児童館でのお正月遊び大会とか、学校でやられる子どもまつりで、地域の

方々や町会が出すブースを、こま、お手玉、折り紙とか、そういう昔遊びを置いて子どもたちと対応する、そういう中で経験をさせてもらいましたけども。

そういう関わりって、いろんな地域ではやっているんですよね、各小学校や児童館、保育園でも。そんなに大きくやっているわけじゃなくて、細々やっているのと、かつ、その一部の高齢者の方々だけに頼った形になってしまっている。高齢化した町会、自治会の人たちの役員の人たちだけとか、敬老会の方々だけみたいな感じで、高齢者全体との関わりという形ではないピックアップされた高齢者との関わりというのが、現状なのかなと。

なので、それはもっと広げていくという方向性がすごく必要なのと、僕は杉並に住んで、まだ10年ちょっとですけども、いろいろお話を聞くと、杉並というと公民館運動がすごく盛んで、いわゆる今の区民センターや会議室というのが各地域に造られるようになったのは、公民館を造って、そこで社会教育をしっかりとしていこうという運動が昔はあったんですよ。そこを通して原水爆禁止署名運動がすごく広がったという。そのときは、行政も区議会も住民の人たちも一緒になってやっていたのが、今は地域の会議室や区民センターの運営と地域住民とが、当時よりも関係性が離れてしまっている気がするんです。

ただ単に貸し館機能になってしまっているんじゃないのかなと。値段もどんどん高くなってきて、小規模でやっている人たちはどんどん回数を減らさなきゃいけない。これは体育施設にも関わる事なんですけども。いろんな機会を住民の人たちがつくろうとしているにもかかわらず、区の施設を使ってやりづらくなってきたという側面がすごく今あるんじゃないのかなというのも気になる場所ですね。

あと、文化って、僕はイメージがすごくつかないんですけども、文化の中には、芸術もあるわけですね。芸術って、個人的には、中学校、高校を卒業したらほとんど触れる機会がなかったのかなと思うんですね。会社勤めで仕事をしているときは、いわゆる芸術というのには全く手がつかなかったんですけども、結婚した妻の話を聞くと、彼女は自分で絵を描いているんですけども、仕事が終わった後に美術館にアフターファイブで行ってくるみたいな話を聞いたときに、まず、仕事が終わった後にそんな時間が取れるんだとびっくりしたのと、その時間帯に文化活動ができるんだ、するんだというのに、すごく驚いた経験があるんですね。

いわゆる芸術というものがすごく遠い存在という感じているのが僕個人で、そういう人は多いんじゃないのかなというところはすごくありますね。音楽もそうですし、絵だったりという。本当はその辺をもっと身近に感じて、身近に携われるような機会というのが、

あったほうがよかったなと思いますね。

○部会長 ありがとうございます。

副部会長に伺いたいのが、ICTというのが、今後、この我々の社会の中でどういうふう
に展開していくのか。

○副部会長 分らないです。すみません。いや、どういうふうにとというのは。

やはり一つは、いろんな形がシームレスになっていくのだろうなというのは確かにある
と思うのです。私は今日の午前中あるところで同じような議論をしていたのですが、あま
り明るい未来には見えないところがあって、例えば今、人工知能がどんどん発達していく
ということの中で、あと10年ぐらいで、今ある仕事の5割ぐらいは自動化されて人を雇わ
なくなって、みんな失業すると言われはじめています。

もう一つ、今、議論をしなければいけないのは、生体認証技術と人工知能が結びつけら
れて、産業化され始めているということがある。それによって、全て個別のサービスを提
供することができるようになるのですが、言い方を変えると、私が自分の自我とか意思を
強く持たなくても、システムが「お前」だといってくれるようになる社会がやってくる
ということなのです。私自身が体の不調を訴えなくても、システムが私の健康管理をしてい
て、「あんた、今日、胃の調子が悪いだろう？」と言ってくるようになる時代が、すでに
構想されていて、動き始めているのです。そうすると、自我とか人格といったことが要ら
なくなるかもしれない。

それは、車の自動運転で問題になっていることに関わってくるのですが、今の法律体系
は全部、人が意思することによって行動を取ることが前提になっているので、責任主体が
問われているのです。簡単に言えば、人を殺した場合、意図せずして車で轢いてしまっ
た場合には過失致死ですけど、意図して轢き殺した場合には、これは殺人罪なのです。全部、
その本人の責任主体が問われた形で法体系もつくられているのですけれども、なぜ完全自
動化できないかという、事故を起こした場合、責任主体は乗っている本人の問題なのか、
車の故障なのか、所有者なのかといったことの解決が法実践上つかないので、できないと
言われているのです。しかし、私たちが、自分の自我とかを全部システムに明け渡してし
まえば、あとはシステムが人を殺してしまったんだから、システムの問題なのだと言える
ようになるということで、車の自動化はさらに進むと言われているのです。そういうこと
があと10年ぐらいで問題になると言われているのです。

そういうことの中で、「じゃあ、私って何なの？」といったことを問えるものとは、こ

こでいう芸術であったり、文化であったりといったこともあるのだらうと思うのです。

私はここで、社会で生きていて、生きる喜びを感じるということというのがしっかりとあるということが大事になってくるのではないかと思います。その意味で、ここで問われていることというのはとても大事ではないかなと思います。

すみません。何か暗い話ばかりになってしまってます。

○部会長 このままにしているとそういう社会になっていく。そういう中であって、本当にそれで我々の人生として考えたときに、人が生まれ育っていくときに、100年生きてかかって、それが本当に幸せかどうかというところも、いったい誰の人生なんだと。

自分の人生じゃなくて、システムが生かした人生を歩いていくことが本当に我々人間にとって幸せなのかとなったときに、やはり「自分とは何ぞや、自分は」、というところでいろんな情報を集めながら自分なりに考えて行動を取っていく。そこに実感が湧いてきて、生きている喜びとか幸せとかいうようなことになっていくんじゃないか。

ある人は、生きるエネルギーというのは感動だと言っているんですね。自分が北海道で暮らしたときの、朝日が出てくるときのあの景色って、今でも忘れられない。すごい感動したんですね。こういう感動体験とかは、やはり我々人間ではつくられない、そういった超越したところの自然というものに対峙したときに、感動というものが沸き起こってくる。それが生きる喜びになってくる。

そういうものと、システムがどんどん決めていくレールの上を歩いていくというような、そういう社会が待っていると言ったときに、私たちはこれからの子どもたちがどのような生き方、どのような教育をつけていかなければいけないのか、育てていかなければいけないのかということを本当に考えていかない。これは10年ビジョンということで、副部会長の話で、10年後にそのような社会がもう来るんだというところを私たちは意識しながら、子どもが生まれ育っていくときに何が本当に必要なのか。そういったときに、まさにこの文化・芸術に感動するとか、そういう機会を提供できるような場が必要になってきているんじゃないかなと、副部会長の話を聞く度に、強く私は思うんですね。

はい、前段の「文化」ということでお話を、意見を頂きました。そういう中で、本当に基本のところの他と共有していくというのは、やはり知っていくという、正しい知識を持つ、知ることがすごく重要ではないかと。そういう機会を提供していくことも、私たちは考えていく。学校教育の中でもそういう機会を提供していく。そして、本物のものに出会うとか。芸術は、本当に本物に出会ったときのあの感動とか、そういったものがある

るんじゃないかなと思います。

我が家の話を少しすれば、うちの娘は高校2年のときに、市民オペラといって、後ろで浴衣を着て、蝶々夫人の歌のバックをやっている、本物のオペラ歌手が来て、同じステージに立った。生のオペラの歌を聴いたときに、これをやりたいと言って、高校2年の11月からそちらに私は進学するんだと決めて、今、大学院生ですけども、その道に行くと言って。本物を体験したことが、本人の中ですごく心動かされたという経験があるんですね。

ですから、本当に多くの子どもたちが、垂流じゃなくて本物を見る、聴く、体験する、触れられるという。高齢者の話じゃなくて、高齢者から直接聞く。障害者の話をするのに、障害者から話を聞くとか触れるとか、そうした機会が、子どもたちに何か伝えていくことができるんじゃないかなというような気がしています。

さらに余談になっちゃうんだけど、長野県の八坂村という山村留学をやっているところがあって、雪を、山を作って、穴を空けるの、何でしたっけ。

○委員 かまくら。

○部会長 かまくら。中学校3年生が主となって、小学生、子どもたちが作っていたんだけど、太陽が出てきて、どんどん溶けてきて作れない。そこに、70過ぎの山村の父親がやってきて、雪を固めて四角のブロックを作って、積んでいくんですね。そして、かまくらが出来上がるんですよ。「何でそれができるんですか？」と聞いたら、「昔、炭づくりで、窯を作った知恵なんだ」と。それを知って、中学3年生は、「生きる重さが違う」と。長さじゃなくて、生きていく重さが違うという表現をするんですね。そういう中で、生きてきた知恵を知ることによって、長老に対する尊敬の念が出てくる。今の若者が、特に日本はそういう高齢者に対するものがすごく世界的に低いという。だけど、高齢者はそういう知恵を持っている。そういった知恵をしっかりと子どもたちに伝えられて、この高齢者はすごいなというような機会があると、高齢者に対する見方も大きく変わっていくんじゃないか。まさにそういう機会が、今なくなっていると感じています。

すみません。ちょっと余談になってしまいました。

そして、次が、「スポーツ」というようなテーマになっていくわけですけども、なかなか頭の中を切り替えるのは難しいとは思いますが、この部会として、一つテーマになっていますので、お話を頂きたいというふうに思うんですけども。

はい、では、お願いします。

○委員 杉並区の体協から来ているので、私が最初に話をしないといけないかなと思って

います。

私自身はテニスで、東京都テニス協会役員もやっていたり、都の体協もちょっと絡んだりして、情報がいろいろ入ってきているので、その辺で私も今のスポーツに対しての思いとか考えを、述べさせてもらいたいなと思っています。

一番最初の回で、私が挨拶のときに、この10年間、スポーツを取り巻く状況というのは非常に変わりましたという話をさせてもらったんですけども、スポーツに関わっていない人はあんまりイメージがないかもしれないんですけども、関わっている我々にとっては、やはり、「ああ、本当に変わったな」というのが現実的にあります。

一つは、よく言われるんですけど、2008年にナショナルトレーニングセンターというのが北区にできた。これで、選手の強化というのが、インターナショナルレベルの強化が一本化できたというところや、2011年にスポーツ基本法ができたというところですね。

この中身自体は、あまり皆さん分からないかもしれませんが、これが一つ、スポーツとして独立した、スポーツが自立したと言ったらおかしいですけども、そういう感覚を持っています。

それから、東京オリンピックが2013年に決定したということと、あともう一つが、障害者スポーツが、2014年に厚労省の管轄から文科省に変わったんですね。この途端に障害者スポーツというのが一気に花開いたと言ったらおかしいんですけども、厚生省がやっているいわゆる障害者のための怪我とか含めたケアのスポーツではなくて、本当に一つのスポーツとして独立できたという、この2014年というのが障害者スポーツの中ではポイントになっています。

それから、2015年にスポーツ庁ができたということで、横串を刺した動きができていますということになっています。

また、最近の動きも見たときに、私自身思うのは、スポーツ、それからそれまで体育という言葉があって、体育と運動、それからスポーツ、この進化が今来ている、ちょうど過渡期かなと思っています。

私自身いろいろ調べてみて、スポーツというのは、今までどちらかというと、杉並区の「健康スポーツライフ杉並プラン」とあるように、健康がメインだったんですね。健康のためのスポーツ、健康のための運動という。健康がメインなんですけども、実際、私もやっている身から見ると、健康のためにスポーツをやっているかということ、決して健康のためにやっけていなくて、「自信を持つ機会を与えてくれる」とよく本には書いてあるんです

けども、スポーツというのはそういった目標に対して、自分が達成する、達成しない。そこで達成したときに自信を持てると。それが一つの楽しみであり、生活の豊かさになる。

それから、仲間といろいろ競い合う。仲間と一緒にあって、チームでゲームをして、そこでの楽しみを見つける。そこには健康の「け」の字も実はないんですよ。健康は後からついてきている。結果的に健康はくっついて来ているので、やはり健康のためにやる。健康スポーツというのは、はっきり言えばリハビリとか、そういう意味でいくと、昔の体育、小学校というのは、そういう意味ではスポーツではなかったと言えるのかもしれませんが、そういう形で徐々にスポーツの認識が変わり始めてきているというのは現実だと思っています。

さっき文化の話でありましたけども、生活において、楽しくなる、豊かになる、そういう自信を持つ機会を与えてくれるという、それがスポーツなんだということになると、スポーツの定義といますか、いろんなスポーツもあるけれども、それは全部ものすごく当てはまっていくと思うんですね。もしかしたら文化より入ってくるかなと思っていて、その境目もほとんどなくなってくるんだろうなと思っています。

そういった意味で、スポーツの認識が変わってきているし、それによって競技スポーツが頂点にあると、そこから教育、いわゆる地域スポーツがあって、それで健康スポーツがあって、高齢者のスポーツがあってという、またそれをひっくるめて生涯スポーツという見方になる。

その基本になる生涯スポーツをやっていく上でポイントになるのが、やはり幼少のときに運動しているか、していないかで、その、もう100年の時代をきちっと動けるかどうかという、その楽しさ、喜び、豊かさを経験するために、幼少のときの運動というのはやはり重要だよなということを最近本当に思っています。ちょっと議論の助けになるかどうか分かりませんが、そういう形で、スポーツというのを健康とちょっと切り離して、スポーツはやはり我々生活の豊かさ、それから楽しさを求めていくものだとしたところの観点でいくと、いろいろ発想が出てくるんじゃないかなと思います。以上です。

○部会長 はい、ありがとうございました。

先ほど、スポーツは自信を持つ機会、それと副部会長が言っていたように今の子どもたちの、日本の子どもは自己肯定感が低いというようなところでいくと、自信を持つところ、そういう自己肯定感を高めていくというような機会にもなっていくんじゃないかなと思いましたが、

今のお話を受けてでも、このスポーツと——スポーツの捉え方も違う、変わってきているというところで、スポーツってこういうようなものなんだというようなお話がありましたけども。

はい、お願いします。

○委員 今、委員のお話を聞いておまして、私自身も昔を振り返って、スポーツは健康のためじゃなく、やっている頃はむしろ体を壊していたと思いますので。

○委員 何の競技をやっていたの。

○委員 俺はバレーボール。

○委員 バレーボール。

○委員 今は、親の世代として自分がやっていることもありますし、あとは、子どもたちがスポーツに関わっていくというところを見ている中で、先ほどの自己肯定感というところで言うと、例えば小学校の5年生とか6年生で、将来何になりたいかと言っていたときに、サッカーをふだんやっている子は、もう7割、8割、サッカー選手。野球をやっている子も、もうほぼ同じぐらいプロ野球選手というふうに、大体これまで見ても答えているのを実感として、感覚としては見ているので、本当に自己肯定感を高める一つの大きな要素だと思うんですね。

また、これは今後の社会環境等がまたどうなっていくのか分からないんですけども、自分の子ども時代、中学とかまでも含めて、そういうスポーツに携わっていたときとの違いという面で感じたこと、——これは自治体としてどういう方向性を定めていくかという面も絡んでくると思うのですが、私が中学、高校の頃は、基本は部活動だったんですけども、今は、種目によっては部活動ではなく、クラブチーム。もう圧倒的にそちらに行く子どものほうが、特に東京都心部だと多いというのは、実感としてもそうだし、おそらく実態としてもそうだと思います。そうした中で、中学生ぐらいまでのスポーツ環境に基礎自治体としてどう関わっていくのかというところは、そういった流れ等々も考えて、どう取り組んでいくのかというのを考えていかなければいけないんだろうなと思います。

あとは、生涯スポーツといった視点では、ハード施設の問題だったり、あとソフトの面では、やはり団体スポーツだと、どうやって仲間云々というところもあたり、何かここを見ていると、結局チームがよく細胞分裂していったりするような環境なんかも見たりはしているので、生涯スポーツと言っているいろいろ見たときに、今後、今もやっているような学校施設の活用等々もあると思うんですけども、そういった取り組みやすさという視

点と、それを自分の生活の中に位置づけてやっていくようなときに、身近な場所でないとなかなか難しいという面はあると思いますので、そういった環境をどうつくっていただけるかというようなことも、今後を考えたときに、一つ検討する内容になるのかなと、少し雑多になってしまいましたけれども、思いました。

○部会長 ありがとうございます。

現状としても、本当に中学校って、部活動よりは、そういったスポーツクラブとかのほかに、あと、教員の指導者も時間的な拘束の問題とか、いろいろあって、本当に我々の世代は中学校の部活というのが中心となっていたけども、それがだんだんと変わってきているという現実の中で、この杉並としてどういうふうに、小学生、中学生あたりのスポーツの体験とか、そういったものを考えていくかというところなんでしょうけども。

ほかに。どうぞ。

○委員 部活の問題というのは結構深くて、なかなか議論にはならないんですけど、我々が、いろんな学校、イベントを含めて行ったときに、今よく聞くのが、部活がどんどん少なくなっていると。多分、中学校でバレーボール部って、ないんじゃないかと思うんだけど、男子は。

○委員 男子は1校です。1か2ですね。

○委員 今は、やはり、女子はダンス部、男子はバスケット部とよく言われていますけども。そういった意味では、先ほど多様性の話がありましたけども、子どもたちがどうやったら自発的にいろんなスポーツに接して、自分の得意なスポーツを見つける機会をどうやって増やしていただけるだろうかというのは、我々大人の責任かなと、実は思っているんですね。

ですから、やはり今、学校で部活といっても、もう運動部が少なくなっているんで、その辺を含めて杉並区全体で考えていく、点じゃなくて面で考えていくというのが、やはり必要になってくるのかなという気がしますし。

もう一つは、指導する側を含めて、先生の負担になってはいけないわけで、そういった意味で、さっき言ったように多様性を認めて、どんどんスポーツの面白さ、楽しさを体験してもらって、継続してもらおうという中では、いろいろ違った施設を活用とか、やはりソフトの面をどのように整備していくのかというのがいろんな施策の鍵になるかなという気がしています。結構、危機感を持っています。

○委員 僕は、運動って、実は嫌いだったんです。小・中学校の体育というのは、ボール

遊びとかをさせてくれるときはすごくよかったですけども、マラソン大会とか、そういうので走らされて、順位をつけられるというのがすごく嫌で、小学校のときの運動会も本当に行きたくないと、泣いて、ごねていたような気がします。

でも大人になってから、社会人になって、ボルダリング、クライミングのロープをつけないバージョンのものを、たまたま近くの公立のジムで行ける場所があつて。あのとき、十五、六年前ですか、それぐらいから始めて、球技みたいに敵がないんで、楽なんですよね。自分のペースでやれるというので長く続けて、気づくと何か結構流行っているなど。

そういう意味では、すごく自分に合うスポーツに巡り会えたんだなと、そのときは思っただけです。これって、すごく重要だなと思って。部活も、一応、中学校で、何か流れて卓球部をやっている。でも、卓球部、僕の時代にやっていると、すごくマイナースポーツで、ばかにされるんです。なので、小・中・高と、スポーツにはあまりいいイメージがなかったのは、やっぱり機会が少なかったというのはすごくあるのかなと。

なので、学校の授業の中だけでやられる、やらされるスポーツではないところでのスポーツへの機会というのは、子どものうちにたくさんあったほうがいいのかなと思います。

お金のある家庭は、子どもの要求に応じて、じゃあ、あれの習い事に行ってみようか、じゃあクライミングジムに行ってみようかとなるんですけども、クライミングジムに行くのも結構高いですからね。経済的な格差関係なく、子どもたちにスポーツの機会というのがつくれるような、それはやっぱり行政側で何か施策ができるといいなというのと、大人になってからもいろんなスポーツに入れる環境があるといいですよ。

僕の職場で、これはスポーツになるのかどうか分からないんですけど、文化のほうになっちゃうのかな、合気道をやっているという人がいて。すごく、体にもいいし、でも若い人たちがいないんだと。区の施設を借りてやっているんですけども、自分よりみんな高齢者だから、若い人にも入ってもらいたいという話をしているんですけども。そういうところにアクセスするというのも、その人がいないと、合気道がこの杉並——合気道じゃないや。居合道だ。居合をやっているというのは知らなかったですし、そういうところのアクセスというのを大人でも容易にできるといいかなと思いましたね。

○部会長 はい。副部長からコメントが何かあれば。

○副部長 私は、部活をばんばんやってきた世代で、私たちの頃は「スポ根」という言葉があつたぐらいで、スポーツ根性ものという、今の、肯定感を高めるかどうか知りませんが、とにかくもう科学的なことは無視して、気力と根性で乗り切れみたいな、そ

う時代でしたから、ちょっと違うと思うのですけれども。

今、先ほど委員おっしゃったスポーツの意義として、自信とかやり遂げる力とか、それから達成感みたいなものですね、これは、今年から始まった学習指導要領の「子どもたちに対して生涯学び続ける力の基礎をつける」ということと同じようなことだと思うのです。生涯、運動、スポーツをして、自分の体力を上げていったり、健康を管理したりということも含めて、そうしたものが人生の基礎をつくっていくということにおいて、スポーツをすることが楽しいというような、そういう体験をいっぱい積んでもらうということがとても大事なのだと言っているのだと思うのです。

ただ、その反面で、先ほど「健康は後からついてきた」とおっしゃったのですが、では体力はどう考えたらいいのかということがあって、私が関わっているほかの自治体では、いわゆる体育の時間以外にも一生懸命学校でいろんなことをやっているのだけれど、子どもの体力が上がらない、上がらないとあって、教育委員会で悩んでいらっしゃるのです。

どうなっているかということ、学校は体育指導を一生懸命やっているのですけれど、家での生活は100メートル先のコンビニに車で行くような生活をしているわけです。そうすると、体力がつくわけがないですよという話になってくる。しかも、最近では山村の子たちとか、いわゆる山村僻地の子たちのほうが体力が低いと言われてたりする。なぜかということ、車で移動する生活をしているからなのです。

その意味で、日常生活というものをどう考えるのかというようなことと、スポーツをどうかかわらせて考えたらいいのかということもあると思います。それから最近では、もう普通になってしまいましたからあまり言わなくなったのかもしれませんが、私たちが学生の頃に言われていたのは、子どもの体がおかしいと言われていたのです。例えば、ドッジボールなんかは、いま禁止ですよ。ふわふわの柔らかいソフトバレーか何かを使ってやらなきゃいけない。なぜかということ、受け止めるときに指を折ってしまったり、それから目をつむらないので、目に当たって眼球が傷ついたりする子たちが出始めたというので、禁止になったのですが、子どもの生理反応がおかしくなっているのではないかという議論があるです。それからあと、学校で、靴を脱いで替えるところ、玄関口にすのこがあって、そこを踏み外すだけでかかとが折れてしまっているとか。転ぶときに手をつけないので、歯を折ってしまう子が出てきて、身体がおかしいと言われて、それに対する措置で逆にやってはいけないことがいっぱい増えたと聞いたことがあるのですけれども。そういうのも含めて、小さい頃から体を動かす習慣をどうつけるかといったことをスポーツと考えてい

くのか、または生活のあり方を変えていくというようなことと、スポーツをどう結びつけるのかということも考えなければいけないなと思って、今お話を伺っていたんです。

さらにもっと言えば、オリンピックなどが来ると、やはり競技スポーツに力を入れようというので、トレーニングセンターができて、ということもあると思うのですけれども、やはり国民全体がスポーツに親しんでいく基礎をつくっていくということや、子どもたちが健康に一生過ごせるための基礎をつくるといったことを考えていくと、さきほど委員がおっしゃったように、やって楽しいとか、やり遂げたとか、ある意味で自分に返ってきて、さらに次に行こうと思えるような力になるようなスポーツのあり方を、区としてどう考えるかといったことも議論する必要があるかなと思って、話を伺っていました。

○委員 お話を聞いていて、すぐ転んで骨を折っちゃうとかという子たちに、あれもしないほうがいい、これもしないほうがいいとなったら、どんどん子どもたちの体力が弱っていくんじゃないのかなと思いつながらお聞きしていました。

杉並区で、もうなくなってしまったんですけども、南伊豆健康学園ってありましたよね。

そこは、ぜんそくだったり、いろいろな病気の子が療養も含めて行って、そこで生活をする中で、すごく健康的になって帰ってくるというお話を聞いて、僕も何度か視察で見に行かせてもらったときに、校舎の周りを走るのを自発的にやっている子たちが何周回ったとかというのを数えて、最終的に南伊豆健康学園から戻ってくるまでに、累積すると東京から大阪まで行ったぐらい走ったぞとか、何かそういうのをやって、すごく体力をつけて戻ってきたりというような。

そういうすごくいい取組をなくすときに、今後、杉並区の区内の学校やそういうところにも取り入れていくみたいなお話が、あったと思うんですけども、今どうなっているんですかね。

○教育委員会事務局次長 教育委員会事務局次長、田中です。

南伊豆健康学園は、いろんな経緯があって廃止になりましたけど、当初は、杉並が昭和40年代に公害問題がひどいときに、ぜんそく児童がたくさん出てきて、環境のいいところということで開設したものでしたが、だんだん時代の流れとともに公害も改善され、肥満のお子さんや生活習慣病のお子さんが利用していました。今、委員がおっしゃられたのは、周囲をマラソンで走って、東京まで帰る距離を記録したりとか、そういったことで本当に健康を取り戻すというのは、南伊豆町のすばらしい環境ですから、本当に機能していたと思います。

廃止後については、今、一つ例を示すと、ウェルネスDAYというのをやっています。

10月末、今年もやりました。例えば、各学校での長縄グランプリをやったりとかですね、いろんなことでその健康学園廃止に伴う、児童・生徒あるいは保護者も含めて健康を意識してもらおうというイベントを続けたりとか、そんなことで代替的な対応をやっているところでございます。

○委員 いや、いい悪いの話ではなく、こちらの話に戻って、日常的な習慣がどうつくれるのかということと、あとそれができる環境をどうつくるのか、なんですよ。

今お話を聞いていても、やっぱり交通事故とかそういう心配もない場所で広い場所があるからそういった健康づくりもできるということだと、僕は北海道で、札幌で育ったんで、冬になったらもうタマネギ畑が全部雪原になって、もう全部そこが僕らの遊び場所みたいな感じになっていたし、公園もたくさんあって走り回っていたんですけども、今、杉並区で子どもたちが外遊び、運動を、遊びという運動をするという、それをどう大人が保障していくかというのは、すごく大きな課題なのかなと。それができることがやっぱりスポーツの発展にも寄与していくし、さきほどのすのこを踏み外しても足の骨が折れない子たちになってくれるのかなということがあるんじゃないのかなと思いました。

○部会長 そうですね。ありがとうございます。

はい、どうぞ。

○委員 うちの娘が2人なので、あまりスポーツとか「ど根性」とかやっていないんですけど、副部会長と同じように、私も、スポーツとは「ど根性」でやるみたいな世代なので、今はすごくソフトになってきて、いいんじゃないかなと思っているんですけど。

娘たちは小学校3年生から中学2年までロンドンで過ごして、日本のスポーツ教育を振り返ったときに、ああ、いいなと思ったんですね。まず、公立の学校に水泳のプールがありますよね。夏しか使えないかもしれないんですけども、私自身も西田小学校、松溪中学を出て、夏休みの間も毎日通って、今はどうか分からないんですけど、線をつけていくんですね、レベルに合わせて。何級、何級とって、級が1級まで行くと、白帽とか赤帽とか緑帽とか、帽子の色と線で分けていって、一本ずつ線が増えていくたびに誇りでしたね。

そういった水泳施設が公立の学校にあるというのは本当に素晴らしいことで、「いだてん」を見て分かったんですけど、前回1964年のオリンピックのときに普及されたとか。

とにかく公立の学校で水泳施設を持っているという国は、まずヨーロッパにはないので、皆さんお金を払って水泳をしに行きますから、そういった、公共の場で、夏場は水泳が使

えるんじゃないかなと。

それで、やっぱり目標というのがすごい大事だと思うんですね。これはスポーツだけではなくて文化も同じなんですけれど、今、コロナ禍で環境的に難しいのかもしれないんですが、Zoomを使ったりしてもいいし、とにかく発表する場所であったりとか、リーグで戦えるというか、勝ち抜いていけるような場所。私たちドッジボールなんかをしながら対抗戦とかをやって、小学校でも中学校でも戦って、楽しかった思い出がありますけれど、そういった、目標を持って、そこに自分がやりたい、行きたい、そういった形で活動できるような組織というか仕組みですね。「すぎなみリーグ」とかでもいいし、バスケットでも卓球でも全部それがあって、文化であれば、杉並公会堂を使って発表が、最後勝ち抜いたところが、一番上手なところが発表ができるとか、そういう目標に向かって成長していけるようなシステムがつくれるといいんじゃないかなと思います。

○部会長 はい。ありがとうございました。

前回はそうでしたけども、今、プールの話があって、グラウンド云々なんていうのは、やはり学校なんですよね。地域にある学校の施設をどう開放していけるかというところがやはり求められてきているのかなと。地域の中に学校、特に小学校というのは本当に地域のキーになっていく施設でもあるので、壁を取っ払って、いかに地域に開放できているかというところが求められていくのかなと。プールを造るなというのなかなか難しいけど、学校には、小学校にはプールがある。あのプールをいかに活用できるか。

これ、日本だとできないと思うんですけど、自分がニュージーランドにいたときには、夏休みに、ニュージーランドの校長の役割というのはいかに学校運営をするかと。

いかにお金を集めてくるかが校長の役割なので。そうすると、夏休みの期間中に、50ドルで父兄に鍵を貸し出すんですよ。そうすると、父兄はその鍵を持って、自由に夏休み中にプールを利用できるんですね。日本だと、「感染だ」、「そこでけがしたらどうするんだ」とか、そんなことでなかなか難しいと思うんですけども。自分の子どもが行っていたところはそういうふうに、金を集めるために、校長先生が父兄に50ドルでひと夏貸す。

親は自由に鍵を持って、プールを利用できるという、そんなシステムがあって。だけど、日本だと無理だろうなとか思いながら。だけどそこにはプールがあるんだよなと思いつつ、そんなところを考えましたけども。

はい、予定の時間を過ぎているんですが、事務局から何か補足の説明等があればお願いしたいと思います。

○スポーツ振興課長 スポーツ振興課長でございます。

ご議論ありがとうございます。私たちは行政ですので、委員が冒頭おっしゃったとおり、やはり健康ということを中心に今までスポーツをやってきたのかなと思っておりませんが、今回、自信を与えてもらえるもの、自己肯定感というようなやり遂げる力、そういった面でスポーツを捉えてみませんかというのは、やはり今後、大切なのかなと思ったところで

す。

文化のところで、副部長から、文化とは異質なものを分けていくものなのか、ミックスしていくものなのかといったようなお話がございました。これは、スポーツにも言えるのかなと思っておりまして、私たちがやっている事業で言いますと、中学生が、代わりばんこに、杉並と台湾を行き来して野球をやっています。その際に、交流夕食会で食事をし、その次の日に野球をやるということなんですけども、野球が終わると、その終わった後でも、お互いに言葉が通じないのに、空いているところでバスケットをやったりするといったようなことがあります。スポーツというのは、そういうコミュニケーションツールとしての能力もあるのかというようなところ、こういった観点も、お話がもしありましたらと思っております。

また、これも副部長のお話で頂いたところで、先日打合せをした際に、どちらの国が忘れたんですけど、インターネットを使って、陣取りゲームを行っていますよと。それもスポーツという枠で、そもそもそれでスポーツというカテゴリーでも話せますかねみたいな話をされまして。コロナのときには、スポーツ施設も閉めましたし、外にもなかなか出にくい状況で、どうなっていくんだろうといったときに、インターネットをコミュニケーションツールとして、動画で運動したりとか、あるいは配信でスポーツ教室が開かれたりとかといった面もありました。東京ですので、当然、場というのは限られていると思います。そういった面で、この後、先ほどの陣取りゲームの話、よろしければ副部長からしていただいて、ICT等に絡めたところも議論としてございましたら、加えていただければと思います。私からは以上でございます。

○部長 ありがとうございます。

リクエストがありましたし、何を話されているか、ほかの委員は分からないと思います。では、副部長、どんなことが今起こっているのかというところを。

○副部長 はい。陣取りゲームだけではないのですけれど。

ICTを使った新しいスポーツがいろいろ今あって、今回、このコロナで家にいなければ

ばいけないときに、たぶん皆さんはゲームを使って、テレビを見ながら一生懸命ストレッチをやったりとか、いろんなことをやられたのだと思います。

それも一つだと思うのですが、私が打合せのときにご紹介したのは、日本には超人スポーツ協会という、今は会社化してしまったのだと思いますが、そういうところがあって、そこはハンディキャップを全部解消するようなゲームのあり方や、器具の開発をしながら、スポーツを楽しみましょうということをやっているところで、例えばそこが作っている車椅子は横に動くことができる、つまりドリフトできる車椅子を開発していたりして、それに乗って動くと、とにかく前後だけではなくて、左右も斜めも全部動けるのです。それでバスケットボールをやると、車いすに乗っているということがハンデではなくなって、面白いとか、いろんなことをやっていらっしゃるのです。

そういう取り組みの一つに、私たちがこのコロナ禍で距離を取らなければいけなくなったときに、何か新しいゲームのあり方を考えませんかと言っていて、彼らが持ってきたのが、陣取りという遊びなのです。簡単に言えば、これはバーチャル空間を使うのですが、自分がいるのはリアルな空間で、自分の車椅子なり自転車にGPSがついていて、例えば、日本ではある大きさのリアルな空間をまず設定して、同じ面積を、ニューヨークにいる人が設定して、そしてGPSでお互いを結びつけて、そして自分がこの空間で、車椅子に乗って走り回って、ぐるっと回って円が結ばれると、そこが自分の陣地になっていく。そういう陣地を、お互いが取り合うというゲームなのです。3分間という時間制限があって、3分で何平米取ったと数字がぱっと出てくるので、勝った、負けたがすぐ分かる。そうすると、接触しなくても、または日本にいなくても、海外と一緒に遊ぶことができる。今、私たちがちょっと冗談でやろうとしているのが、例えば日本全国国取り大会みたいなことをやって、「俺は北海道を取ったぜ」とか、「俺は九州を取ったぜ」みたいなことを自転車でやったらどうかとかという話もしているのですけれども、そういうことができる時代がやってきているということでもあるのです。

さらに言えば、今やゴーグルをつけてそれをGPSで結びつけて、それが至るところにつながっていれば、例えば日本にいる人とアメリカにいる人がテニスをできたりするようになるですとか、またはスカッシュなんかはすぐそこでできるようになってくるというような時代になっていますので、そういう形での遊び方とか楽しみ方というのがどんどん出てくるのではないかということ、ちょっとこの間お話を差し上げたのです。新しいあり方としてはありではないかと思っています。

○部会長 もう、そんな時代がやってきているというようなことを含め、何か……。

○委員 よくありますよね。eスポーツでしたっけ。あれがスポーツなのかゲームなのかという議論がありますが。

○部会長 そうですね。世界大会もあつたりとかね。

○委員 そうですね。

○部会長 プロになっている人もいるしね。

○委員 はい。

○部会長 どうぞ。

○委員 私はeスポーツはスポーツだと思っているんで。結局、遊びからスポーツって、全部出てきているので、まあ、ゲームですよ。テニスも、もともとはフェルトの小さなボールをガットで何回も何回も繰り返すのが、それがゲームだったということが起源。みんなそうじゃないかと思うんですよ。だから、そういう意味で、新しい遊びがどんどん発想として出てきて、それが面白くて、ゲームになって、スポーツになっていく。それがもう、だから当たり前の話かなという感じがするのと。

逆に、子どもたちにそういった、さっき副部会長がおっしゃられたように、自立した少年になる、それをどういうふうに持っていったらいいんだろうといったときには、例えば、遊びの中で自分でルールを決める。決められるような子どもにするとか。そうすると、自分たちで、子どもがルールを作れば、やはりルールを守る。絶対仲間同士で守るんですよ。

だから、そういったところからスポーツのルールをどうして守らなきゃいけないか、結構悩ましい問題なんです、実を言うと。

そういうところとか、やはり自立した少年、子どもたちにどういうふうにしていく、そのために一つの遊び、スポーツというのを、前回の子育ての話に戻るかもしれませんが、それが結構全体を通して考えていく一つの大きな目標になるのかなと、私自身は思っているところですね。

○部会長 ありがとうございます。

いかがでしょうか、どうぞ。

○委員 非常に限定した話になってしまうのかもしれないんですけども、今後を考えたときに、大人になってからの生涯スポーツとして、今、学校施設を借りている団体というのも、現実にそれなりにたくさんあると思います。自分たちがするという目的で。

あと、先ほどから議論になっているように、まずは小学生に、多様なスポーツを経験し

てもら。それが、自分がやりたくなるのか、このスポーツは合わないとなるのかは別として、そういった機会を、今だと、一番多いのは平日の夜間ですけれども、自分たちが「するスポーツ」という形でやっている方たちに、子どもたちがスポーツをするきっかけになる、——支えるほうの役割を制度化とか義務化をしてしまうと、堅苦しくなって、むしろやりづらくなると思うんですけど——、そこをつなぐような仕組みというのを、何かしらい形でこの先つくっていくことができれば。先ほど文化のところでも出てきたように世代双方にとって、ざっくり言えばおじいちゃんおばあちゃんの世代と小学生とのつながりになることも、スポーツによっては十分あるので、そういった「する」に特化していた人たちが、なにかしら支える側にある程度気楽に回れるような、恒常的にずっと支えなきゃいけないというハードルが上がるので、きっかけづくりを支える役割を担えるようなことができると、何かよりよい形になるのかなと。その中で本当に専門的にスキルのある人であれば、中学校の指導、中学生、部活なりの指導ということも、両方とも活動時間がどのあたりかという制約というのはあると思うんですけども、そういうつなぎ目をつくっていきけるような、仕組みとまで言わないですけども、形が取れるといいのかなと思っております。

○部会長 ありがとうございます。

いろいろ皆さんからお伺いして、特に、スポーツって、どんな意味があるんだということころでは、子どもたちに、そういった達成感であったり、自己肯定感を高めるとか、そういうような機会もスポーツにあるというようなお話もありですね。ただ、今、体力というお話の中で、我々のこの日常生活、子どもたちの生活習慣を考えていったときに、そういう機会が奪われていってしまっているという現実があり、では、そうした機会を、どういった仕組みをつくって子どもたちに提供できるのか。委員が言っていたのは、今、地域にそういったスポーツをやっている人たちがいるから、その人たちを活用しながら、つなぎをできるようなきっかけができればいいのではないかと。

特に、全てのところに共通するんですが、子どもたちにいろいろな経験、体験ができるようなきっかけ、機会を提供し、その中で自分に合うものを選んでいくというような、そんなような取組も必要ではないかということではなかったかなと思うんですが。

今まで、スポーツを、前半には文化のお話をそれぞれ委員からお話をさせていただいて、これから残る15分ぐらいの時間になりますけれども、文化、スポーツの横断的な議論やこれまで言い足りなかったところなどのお話があれば、皆さんからまたご意見いただければ

と思っています。はい。お願いします。

○委員 二つのテーマに関連してくると思うんですけど、スポーツって、どうしても世代で分かれてしまうと思うんですよね。子どものスポーツというと、例えば小学生だけでやるスポーツ。中学校の部活だったら、中学生だけでやるスポーツ。大人だったら、大人だけでやるスポーツ。高齢者だったら、高齢者だけでやるスポーツというふうに分かれていると思うんですけど。先ほどもお話に上がったように、スポーツは、コミュニケーションの場でもあるわけじゃないですか。ということを見ると、いろんな世代が参加できるようなスポーツの場というものがあってもいいのかなと思って。

さきほど委員からも話がありましたけど、ふだんスポーツに関わっている大人が子どもに何かを教えるとか、そういうことでいろんな世代が交じり合っ、コミュニケーションの場としてのスポーツというのができてもいいのかなと思って。生涯スポーツというのをやっていくに当たって、子どもにはなかなか生涯スポーツというもののイメージが湧かないと思うんですよね。子どもとしてのスポーツしかないと思うので、これから自分の体がどんどん大きくなっていく。そして老いていく中で、スポーツというものとどういうふうに関わっていけるのかというのを、いろんな世代が関わるスポーツの中で学ぶことができるんじゃないかなと思いました。

○部会長 ありがとうございます。コミュニケーションのスキル一つに、スポーツというのはあるんですよね。スポーツを通して、世代を超えてスポーツという共通のところでのいろんな学び、交流ができるという。さらに言えば、ICTを使うと、もう離れたところでもできてしまうというようなところもあったりと、皆さんから何かスポーツ、文化、共通するところ、それぞれのところでもいいですが、何かコメントやご意見があれば。

副部会長から何かありますか。

○副部会長 はい。少し極端な話をするかもしれませんが、一旦学校的なものを捨ててしまうという議論をしたら面白いかなと思っていたのです。

先ほど委員もおっしゃったのですが、学校で健康とか体力とかという、明治以降、何で学校体育が入ってきたかという、これは国民の体質改善ということと絡んでいて、体操は基本的には兵式体操ですから、これはオランダから導入しての、体格のいいオランダ人がやっていた体操を導入して、日本人の体質改善で、150年かけて平均身長を20センチ伸ばしてきたのですね。

そういったある意味で規範化して、外から強制力を働かせて、国民の体を改造するとい

う形で作られてきた学校体育から、もう離れましょうという話をしていると思うのです。

それは結局体力のための体育であったり、健康のための体育になっていってしまうのですけれども、先ほど委員がおっしゃったのは、むしろ楽しむためのスポーツであったり、自己肯定感を高めるためのスポーツであったりですとか、やり遂げる、また新しくルールを作っていく、遊びから発祥するスポーツである、みたいなものです。

遊びについては、定義はいろいろあるのですが、本当は、可変性というか、自分でルールをどんどん作り替えていって、だけどもある種の「枠」を超えないというか、そういうものが遊びだと言われたりするということもあるものですから、その意味では創造性が発揮できる場所として遊びというのはあるはずなのです。

そうしたものとスポーツ、ですから、文化も当然に、学校的な「みんな一緒に規範化」ということではなくて、一旦それを外してみても、みんながざわざわっと集まる中で、刺激を受け合いながら、楽しい生活をしようよといって提案し合うような形の中で、いろんな遊びや、芸術や取組が生まれてくることではないかと思うのです。

実はそれこそが、今の教育改革の一つの大きな眼目でもあって、つくり出す力を子どもたちが持つといったことにつながるのだらうと思います。その意味で、一旦、そうしたものの枠を取り払って見たところで、では私たちがどうであったのか、または子どもたちがどうであるのかといったようなことを、議論してみても面白いかなと思って、お話を伺っていました。

スポーツや文化というのは、やらせるとかそういうことではなくて、枠を取っ払っていく力になっていくものになるのではないかと思います。それには、学校的な体育であったり、学校的なスポーツであったり、または学校的な文化や学びというのは、いちど取り払ってみると、何が起こるか。

先ほどのプールの話もありましたが、学校と社会をなるべくシームレスにして、学校の中にいろんな人がざわざわっとしている状態をつくったら面白いかなと思ったりするのですけれども。先生方は嫌がるかもしれませんが、管理する側は大変だとおっしゃるかもしれませんが、整理をすればできないことでもないのではないかと思うのです。

例えば、運動場でプレーパークがなされていたり、理科室で、退職したどこかの会社のおじさんが何か理科の実験をやっているとか、そんなことも含めて、いろんな人が学校の中にいるよという場所を子どもたちにつくると、ちょっと面白いかなと思ったりするので。

すみません、こんな話になりましたけども、そう思います。

○部会長 いえいえ。私が、学校開放の話をして別の市の審議会でも話をし、そこには校長先生がいて、「えっ、私たち9時半までいなくちゃいけないんですか？」という。

だから、もう学校は、「もう、できません」と、手を上げてくださいと。夜までいるということじゃなくて、地域の方々の力を借りて、学校を活用していきましょう、活性化していきましょうよと。もう、先生たちが学校の中を全部、夜も含めて全部自分たちがやるというそんな発想はもうやめてくださいと。それは先生が潰れますよと。だから地域の方々の力を借りて、そこに場があるんだから、そこを地域の人たちに活用してもらいながら開放して、そして先生たちも、ある時間になったら上がればいいじゃないですか。あとは地域の人たちにお任せしますというにしていく。どうしてもまだまだ学校というのは自分たちの聖域だから、人には、というところがあるけど、そこを取っ払って、「もう学校はできません」と、もうお手上げをしていただいたほうが、学校もすごく楽になるんじゃないかなと思うんですが。

まあ、これは勝手な言い分で、学校の先生からすると、何を勝手なことを言っているんだと思われてしまうんですが。けども、やっぱりそういうような発想を変えていかないと、なかなか地域の中で変わっていかないんじゃないかなと。もっと言えば、学校が変われば地域も変わっていくし、子どもたちも変わっていくと思うんですね。だって、多くの時間を過ごしているのは学校ですから、子どもたちって。その学校が大きく変わっていくというのは本当に求められてくる。

さきほど副部会長がおっしゃったように、理科実験なんかは、どこかの会社の人に来てやってくれるという。亜流の理科をやった先生が理科実験、また、今、理科の実験なんかはどんどん減ってきているという、授業の中で、実験こそ面白いわけですね。けれども、知らない先生が教えるのでできないからというので、理科の実験がなくなって、プリントとかで終わってしまうという。けれども、そういった専門の人が来て、本物の実験を見せるとかやらせるとかいうふうにしていくと、子どもたちも、こんなに科学は面白いんだというふうになるんじゃないかなと思うんですね。これは、まあ、なかなか…。教育委員会、次長がいらっやっていますけども。すみません。

○教育委員会事務局次長 では、少しだけ。

今、部会長、副部会長の、お話を聞いていて、いろいろ接点があるので、少しだけお話しします。校長先生の話が出ましたけど、今、区としても少し検討を始めている段階ですけども、学校って、地域にあまねくある存在で、それこそ副部会長にも関わってもらった

点検・評価でも出てきましたけど、いろんな区民の活動の場になるんですね。

それはスポーツも含めてだと思いますけど。そういった公共財がこれだけ杉並区にありますので、そういったものを、極端なことを言えば、例えば平日6時までは学校ですよ、6時以降は地域の皆さんのものですよということで、教員の働き方改革も含めて、今、そういった方向性を模索して検討し始めているところです。

本日は基本構想第3部会でございますけども、こういった新しい基本構想の方向性の中に、そういったことが出てくるというのは、今、手がけ始めているところと、軸足の向く方向が一緒なのかなというふうに思っていておりましたので、ぜひ、議論を続けていただければと思います。

それから、今日は文化・スポーツということで、いろいろお話が出てきて、副部会長の話を聞いていて、個人的な感想ですけども、AIの進み方とか、ちょっと暗いお話ということがありますけど、やはり文化とかスポーツというのは、そうした世の中で、人間として、心の潤いというか、そういったものは、生きていく中でとても大切で、さきほど委員から、楽しみ、生活の中の豊かさといったお話がありましたけど、そうした心の潤いとか豊かさというんですかね、本来、本当に人間が生きていくための一番必要なところを担うような、そんなような感じを、感想として持ったところです。

○部会長 はい。ありがとうございます。

○副部会長 一言いいですか。

○部会長 どうぞ。

○副部会長 すみません。今のお話で、さきほど私がAIなどについて暗い話をしましたけれども、これは、もう産業化が始まっていて、例えばIoTという、モノのインターネットということで、電動歯ブラシを使っていらっしゃる方がいらっしゃると思いますが、これ、今、電動歯ブラシがインターネットとつながっていて、あなたが毎日どこの部分をどれぐらい、何分間どのような磨き方をしたかというのが、全部、データが取られるようになっているのです。

そうすると何が起こるかということ、それに対して、会社のほうから、「そういう磨き方をしていると、あなたは何年の何月何日ぐらいに歯槽膿漏になりますよ」といって、脅されるわけです。そのために、それを防ぐためには、こういう薬を使って、こういうふうな磨き方をして、という指導が入るようになるのです。

これはあらゆるところで起こるようになってくるのですけれども、この企業の人たちと

話をしていると、「これって、脅しじゃないか」と私が言ったら、「そのとおりです」とおっしゃるのです。「脅されて、物を買わせてるんでしょ？」と言ったら、「もう、ほんとそうなんです」とおっしゃるのです。それは、逆に言うと、不健康な状態を健康というゼロに戻す話をしているだけで、「あなたはこうしているとなっちゃいますよ、ここが悪いでしょ、だからこれを買いませうね」とか言って脅しつつ買わせているのですけれど、実はこれ、市場は大きくなるのです。マイナスをゼロに戻すだけです。今おっしゃったのは、ゼロから先の話をしなきゃいけないということなのです。

これからインターネットやAIがどんどん発達をしていけば、当然そうなるっていくという面があるので、それを使いこなしながら、健康という基本は保障されていく中で、その先を私たちはどうやって生き生きと生きるかとか、楽しい生活をつくるかということにつながっていくのだらうと思うのです。そこが、おそらく、この文化やスポーツになるかもしれないし、さらに、創造していくとか、自己肯定感を持って、もっと次へ行こうとする、新しい価値をつくり出すということにつながるのではないかと。実はそうしたことを企業がうまく捉えていくと市場が大きくなることは、何となくわかっているのだけれども、どうしたらいいかわからないというのが今の彼らの言い分なのです。

やはりこういうことというのは、ここで議論していただいて、ゼロから上のものを、つまりプラスにしていくところをどれくらいみんなと一緒にプラスにしていくかといったことが、この社会をより豊かにしていくものにつながるのではないかと考えています。

○部会長 いえいえ、ありがとうございます。

そういう中であって、今日はタケカワ委員と泉委員がいませんが、本当に、子どもたちにとって、この杉並には、そういう専門家、プロがいるんですよ。こういう地域の社会資源を本当に活用しながら、子どもたちに本物の体験をさせ、そしてそれはスポーツの世界でも、全ての世界において、それでいろいろな体験をさせていながら、子どもたちがどう感じ、どう考え、そして自分が選択できていく。そういう選択できたことに対する喜びにつながっていくし、何かしたい、こうしたいと思っても、体力がなければ、それが実現できないとなれば、基本的な日常生活の中で体力をつけていくとか、そういうようなことも、我々の日常生活、これは大人側が、生活自体、もう一度見直していかなければいけないし、よく言われるように、郡山が、あの震災の後、全国体力テストが落ちたんですよ。あれは外遊びの制限が、時間制限がなされてきたことで落ちたというようなこと。そして、子どもたちが児童公園、児童遊園で遊ばないというのは、まさに三間というような、

そういった機会が、遊ぶ機会がなくなったけど、もう一方では犯罪に巻き込まれるから、親御さんが地域の中で子どもだけで遊ばせるということをやめさせている。これって、本当に社会的ネグレクトですよ、子どもの視点からすると。社会が子どもたちの遊びとか、そういったこと、楽しみを全て奪ってしまっていることを、私たち大人は、もう一度そこを考えていかなければいけないんじゃないかというところ。

そういったときに、スポーツは、一つ、コミュニケーションの手段でもあるんだというところでも、スポーツのあり方ということをもう一度改めて見直していくということも必要になってきている。そして、文化は、なかなか見えないけども、文化・芸術、やはりそれは生きる喜びの根源でもあると私は思っているの、すごく大事にしていきたいなと思っています。

そんなようなことをこれからも、この杉並の中で何ができていけるのか、どういうきっかけをつくっていけばいいのか、仕組みをつくっていったらいいのか、10年後の杉並というところを考えていったときに、本当に、副部長から、自分なんかも想像のできないような社会がもう動いてきているというところを踏まえながら、そこに対して、私たちは何を大事にしていかなくちゃいけないのかということを考えて、これからの議論を進めていければいいかなと思っています。

今日も多くの委員の方々からご意見を頂きまして、誠にありがとうございました。まだ、4回、5回とありますので、言い足りなかったところは、そこで補足、コメントを頂ければと思います。

本日の議論の内容については、様式2-2にまとめ、次回の会議で配付できるよう、事務局に対応をお願いしたいと思います。

それでは、最後に、今後のスケジュールなど、事務連絡がありますので、事務局から説明をお願いします。

○地域活性化担当部長 本日は長時間ご審議いただき、ありがとうございました。

審議の途中で頂いたご意見で恐縮ですが、前半の交流では、海外の交流とか文化とか、それからスポーツも含めて、世代間、また障害、こういったものに対して、五感で理解して、お互いに理解をして、お互い違いを認め合うということが非常に大事だという点。それから、部会長からも頂きましたが、やはり、生きていく上では、幸せだったり、エネルギーというものが感動につながっていくというお話も頂きましたし、スポーツでは、生涯学び続けるために、やはり幼少期から基礎となる体力が必要だという点。また、ほかにも、

このスポーツを通じて目標を持つことによって、自信ややり遂げる力、達成感とか、そういったものを身につけていって、生活を豊かにする、と。非常にたくさんのご意見を頂きありがとうございました。

戻りまして、本日のテーマである文化・スポーツについては、ご意見として言い忘れてしまった点とか、本日のご審議を通じまして、新たな視点など、思いついたことがございましたら、12月11日金曜日を目途に、様式3に記載してご提出いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

なお、次回の日程でございますが、12月14日月曜日の18時から、場所は同じ会場となります。最後の審議分野となりますが、今回は「学び」をテーマにご審議いただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。私からは以上でございます。

○教育委員会事務局次長 度々すみません。教育委員会事務局次長です。

私から最後のお知らせになりますけど、「すぎなみ教育報」というのが今日配られていると思います。見開きのものなんですけれども、後ほどご覧いただければと思います。

(教育シンポジウムのチラシを配付)

○教育委員会事務局次長 あ、ごめんなさい。教育報ではなくて、チラシを今配ってもらっていますよね。大変失礼しました。今、教育シンポジウムのチラシが配られたと思います。すみません。こちらのチラシのほうです。

12月12日の土曜日になりますけども、午後2時から4時半まで、高円寺に新しくできた高円寺学園という小中一貫校を会場として、「みんなで話そう！考えよう！これから10年の杉並の教育」というテーマで、杉並区の教育シンポジウム2020を開催する予定でございます。

今は、基本構想第3部会という場でございますけども、区の基本構想に相当するものが、杉並区教育委員会とすると、杉並区の教育ビジョンというものがございます。これも基本構想と同じように来年度で終期を迎えますので、令和4年度以降の新しい教育ビジョンをつくるために行う教育シンポジウムでございます。

前にもお話がありましたけど、新しい教育ビジョンの審議会については、副部長に座長を務めていただき、部会長にも委員として加わっていただいておりますけども、今後検討を進めていく上で、幅広く皆さんの意見を聞きましょうという趣旨のシンポジウムでございます。

チラシを見ていただくと、1部、2部で構成されていまして、1部がパネルディスカッション

ョン、2部が参加者によるグループワークでございます。当日は、副部会長に第1部のパネルディスカッションのパネラーとしてご出演を頂く予定です。そういった趣旨でやりますので、皆さんお忙しいと思いますが、委員の皆様、お時間があれば、ぜひご参加いただければと思います。

少しご紹介をさせていただきました、ありがとうございます。

○部会長 どうもありがとうございました。

以上で、本日の審議会の議事は全て終了いたしました。円滑な議事進行と、長時間にわたり、多くの意見を出していただいたことなど、ご協力を頂きまして、誠にありがとうございました。

本日はこれにて散会といたします。お疲れさまでございました。ありがとうございました。